明石工業高等専門学校図書館

図書館報

第46号　平成22年12月

ＩＳＳＮ　１３４４－５２４３

目次

『人間の建設』・・・・・・・(1)
自著紹介・・・・・・・・・・(3)
私と読書・・・・・・・・・・(3)
私と読書・・・・・・・・・・(4)
読書感想文コンクール・・・(5)
推薦図書・・・・・・・・・・(9)
利用統計・・・・・・・・・(10)
利用案内・・・・・・・・・(11)

「人間の建設」岡 潔・小林秀雄対談集

京　兼　　純

初版が出されたのは昭和 40 年（1965 年）であり、高等専門学校制度創設の第一期校として明石高専が設置された 3 年後のことです。45 年前に出版され、随分昔になりますが、今年の 3 月に新しく文庫本として生まれ変わり書店に並んでいます。本書は表題にもありますように､数学者で多変数解析函数論の第一級の研究者である岡 潔先生と高名な文芸評論家の小林秀雄氏の対談を載せたものです。単に対談といっても、それはじつに長いながい話し合いで、それこそ「知性」がぶつかり合った迫力のあるものとなっていますし、今読み返してみても色あせること無く生き生きとした内容となっています。

文庫本として出版された本書の解説者は、脳科学者として広く知られている茂木健一郎氏です。表題は『情緒』を美しく耕すためにとし、冒頭に、「二人の『知の巨人』が対談した“人間の建設”は、生き生きとした精神のダイナミクスに満ちていて、何度読んでも面白く、新たな発見がある。」と紹介しており、私自身もその通りだと思っています。

高専という学校で、科学技術や工学の領域を専攻している私たちにとって、話されている内容は示唆に富んだ箇所が数多くあります。例えば、自然科学について。岡先生から 20 世紀の科学技術の急速な進展は、理論物理学が基盤となっているが理論物理学は一体何をしてきたのか。果たして「創造」ということをしてきたのか、というくだりで原子爆弾という「負」の側面についての問いかけを発しています。また小林秀雄氏からは、時間の解釈についてベルグソン（フランスの哲学者）とアインシュタインが衝突したこと。ニュートン以来、科学者が計測できる抽象化した時間と私たちが生活している空間を弛まなく流れている時間との対峙の話、量子力学、エントロピー、現代数学について、さらに幼児が数学上の「１」という概念をいつ体得するのかについて・・・。本書の魅力は、人が紡ぎ出す「知性」を縦糸とするならば、横糸は仏教、絵画、酒、俳句、文学論、自然科学、人間の死生観などなど多様な色彩で色づけされた美しい一反の織物となっています。

ここで横道に入りますが、岡先生は奈良女子大学の名誉教授で、退職後は新薬師寺近く

に住まわれていました。私自身も少し離れた官舎から奈良高専へ通っており、この辺りはのどかな田園風景が広がり、高円山の裾野を東西方向に歩きますと、椿で有名な白毫寺に行くことが出来ます。先生が奈良にお住まいということと、文化勲章を始め多くの受賞歴があり、また行動のユニークさから先生をモデルにした映画「好人好日：松山善三脚本」が昭和 36 年（1961 年）に松竹から配給されています。主人公の数学者には笠 智衆氏が演じ、岩下志摩さんが娘役を演じていました。その娘さんが奈良高専で音楽の非常勤講師として指導をしており、学生からその話を聞いたときには、赴任したばかりの私にとって新鮮な驚きでした。映画のモデルとなった岡先生が成し遂げた仕事は、一変数解析函数論から多変数へと一般化したことです。これは当時、極めて困難な仕事であるといわれており、この困難な研究を孤立無援、唯一人で乗り越えて解決したことにあります。解決した当初、欧米ではとても一人で挑戦したとは信じられなく、ブルバキ（フランスの数学者集団）のようなグループで行った業績であると思われていました。

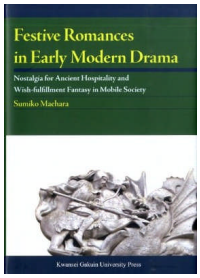
明石高専は自然との共生を教育目標の一つに掲げています。本書には自然や科学に関することが数多く話されています。また学問には決して無駄なものはありません。学生の皆さんは、図書館に試験勉強やレポート作成のみで通うのではなく、多くの書物と出会い自身の感性を磨くようにして下さい。

（きょうかね　じゅん　校長）

『対話 人間の建設』
岡 潔・小林秀雄著 新潮社 1965.10 年
請求記号:114.2.0
登録番号:007356

『人間の建設』
小林秀雄・岡 潔著 新潮社 2010.3
請求記号:114.2.0
登録番号:007356
ISBN:978-4-10-100708-3

自 著 紹 介



前原　澄子

Festive Romances in Early Modern Drama: Nostalgia for Ancient Hospitality and Wish-fulfillment Fantasy in Mobile Society. Kwansei Gakuin University Press 2009 年

ISBN: 978-4-86283-044-9
請求記号:534.0.K　登録番号:101445

日本ではやがて江戸時代が始まろうとする頃、英国は女王エリザベス 1 世の統治のもと、カトリック大国スペインに対抗して海外へ植民地を広げていきます。それに伴い、ロンドンは国際貿易都市となり、商人階級の台頭によって新しい大衆文化が栄えます。なかでも当時最大の娯楽は演劇でした。晴れた日の午後、人々は屋根もない円形劇場に集まって時局を反映する劇を楽しみました。かの有名なシェイクスピアも、ちょうどこの頃に活躍した劇作家のひとりです。本書は、1590 年代から 1610 年頃までに上演されたロマンス劇のうち、五月祭、毛刈り祭、収穫祭、クリスマスなどの古い祝祭行事をテーマにした作品を考察した書です。中世以来、祝祭は地域の民に「無償のもてなし」を行うことを大きな意義としてきましたが、これらの劇ではこうした習慣の衰退が叫ばれており、大衆の娯楽であった演劇にも当時の社会経済の変化が大きく映し出されていることが窺えます。

（まえはら　すみこ　一般科目）

*BOOK * ・・・・・・・・・・・* BOOK *・・・・・・・・・・・ * BOOK *

私 と 読 書

渡部　守義

『生物多様性とは何か』井田徹治著
岩波書店 2010.06　ISBN 978-4-00-431257-4
請求記号：468.0-I　登録番号：102013

多様な生き物や生息環境を守り、その恵みを将来にわたって利用するために結ばれた生物多様性条約の第 10 回目の締約国会議、いわゆる COP10 が 2010 年 10 月に名古屋で開催される。世界各国の生物多様性の低下や途上国の貧困問題は、我々の先進国の市民の生活の代償として生じ、今後人類が持続可能な発展をするためにも時間的に余裕がない期限付きの大きな問題である。紙面や報道を通じて問題としては認識できるが、平素の生活の中では実感しにくい問題でもある。

この本の中では、何故エハの生息地の保全やコウノトリの復元に多額のお金が費やされているのか、人類が生態系から受ける恩恵について生態系サービスという概念でわかりやすく解説している。著者は生物学者ではなく記者で、専門知識に特化してらず、環境問題に興味を持つ学生は一見の価値があると思う一冊である。タイトルが堅苦しいと思われる方は「エビと日本人 1,2」「バナナと日本人」（岩波新書）なども、面白い視点で日本と途上国の環境問題と貧困の関係を描いている。

（わたなべ　もりよし　都市システム工学科）

私 と 読 書

山形　紗恵子

『志学数学』ー研究の諸段階ー発表の工夫ー　伊原康隆著
ｼｭﾌﾟﾘﾝｶﾞｰﾌｪｱﾗｰｸ東京 2005.4　ISBN: 978-4431711407
請求記号：410.7.I　登録番号：101990

一流の数学者である著者が、若い数学の研究者や数学の研究者を志す者に対して、数学の研究とは何か、数学の論文を書くということはどういうことか等について、著者の若いころからの経験を交えながら、まとめたのがこの本である。

特に、海外での研究生活の話や、国内外の著名な数学者との交流について、著者の失敗談を交えながら書かれているので、著者のような偉い数学者でも色々失敗をしたり、苦労をしているのだなと親近感がわく。そして自分ももっと頑張らなければという励みになる。さらに、著者の研究に対する姿勢、考え方を通して、読者にとって数学を研究するということは何なのかを考えさせられる。そればかりではなく、物事の本質を見極めることの大変さと大切さについて深く考えさせられる本である。

（やまがた　さえこ　一般科目）

*BOOK * ・・・・・・・・・・・* BOOK *・・・・・・・・・・・ * BOOK *

購入希望図書案内

図書館に備えてほしい資料があれば、下記の申込書をカウンターに置いていますのでお申し込みください。資料の種類は、図書、視聴覚資料などジャンルは問いません。

可能な限りご要望にお応えしています。

購入希望図書申込書

書　名					
著 者 名		発行所		ISBN	
希望理由					
申込者氏名		学　年		学籍番号	
連 絡 先	携帯電話 メールアドレス				

（平成２１年度の購入希望図書申込は 167 件あり、145 件の図書等を購入しました。）

平成２２年度『読書感想文コンクール』入賞作品

余り者の世界

最優秀賞　　都市システム工学科２年　石橋　春佳

さびしさは鳴る。耳が痛くなるほど高く澄んだ鈴の音で鳴り響いて、胸を締めつけるから、せめて周りには聞こえないように、私はプリントを千切る。細長く、細長く。紙を裂く耳障りな音は、孤独を消してくれる。

高校一年生のクラスの「余り者」長谷川初美、通称「ハツ」は、ある授業で先生の「適当に五人組で座れ。」という指示で一人になった。もちろん適当に座る人なんて一人もいない。ごく一瞬のうちに緻密な計算がなされる。そしてハツは、「誰か余ってる人は居ませんか。」と聞かれて手を挙げ、あのみじめさを味わい、冒頭のように感じた。

私にも中学二年生の頃、部活で一人ぼっちになった経験があった。笑い声なんか絶対聞きたくない、周りの空気が身を突き刺すよう、休憩時間が長すぎる、そんなつらいことを毎日思った。きっとハツも同じだと思う。

しかしなぜ、ハツは「さびしさは鳴る」と感じたのだろう。さびしさは決して耳で聞こえたりはしない。一人ぼっちだった私にはすぐに分かった。きっとハツが孤立していて、ハツの五感が敏感になっているのだと思う。私が空気を痛く感じたように。

孤独なハツの気持ちをより理解するために、私の中学二年生の時の日記を読むことにした。

「明日も不安。」とか「どうすればいいの、ドン底にいるよう。」とか悲しい言葉でしか書かれていなかった。ただそれだけで十分その時のことを思い出せた。今になっては、「あの時もし好きな人でもいたらどうだったのかな。」と楽しい想像もできた。きっと毎日が楽しくなって部活も頑張れただろうし、この日記にも可愛らしい言葉が増えたと思う。私はあの頃考えてもみなかったけど、ハツはどうなのだろう。

ハツの身近な男子といえば、もう一人のクラスの「余り者」にな川である。そのにな川とハツはとても不思議な関係にあった。

孤独な二人が互いに分かち合い、恋に堕ちていくのだろうなと予想がつく。もしそうだとしたら、少なくともハツがもう「さびしさは鳴る」と感じることはなくなると思う。だが、ハツとにな川はそんな単純な関係ではなかった。

ある日ハツがにな川の背中を蹴ったことがある。にな川は何も悪いことをしていないのに、ハツは思いっきり背中を蹴った。ハツがにな川を蹴った理由は何なのか。

にな川は実はオリチャンというモデルの大ファンで、恋愛に似た感情を持つほどだ。それは小学生の女の子みたいで、私には少し幼く思えた。にな川の「にな」が小学生が書くみたいに平仮名で表現されているように。また、にな川の五感はすべてオリチャンに向けられているため、余り者でもまったく気にしていない。

それに対して常に周囲に五感を向けているハツは、「何であなたは平気でいられるのよ。」、「高校生になってもオリチャン、オリチャンって言ってる人よりまるで私の方が弱いみたいじゃない。」と感じずにはいられないだろう。この気持ちから蹴るという行動に結びついたと私は思う。一方でハツがにな川に対する気持ちはそれだけではなく、小学生の時よく見られた「好きな子をいじめたくなる気持ち」もあったのではないだろうか。この本を読み終わった時、この先似たもの同士の世界一不器用な恋になる淡い予感がした。

高校生の青春小説にはとても似合わないこの二人。しかし私は、この不器用で青春が苦手な二人が創り出した世界が、なぜか愛おしく思えた。

（「蹴りたい背中／綿矢りさ著」　河出書房新社　2007 年）

手紙を読んで

優秀賞　　都市システム工学科２年　山本　泰之

誰もが犯罪加害者の家族になりえるーそれは当たり前のことなのに、人は不思議と自分は被害者、または被害者の家族にしかならないと思っている。そういう自分もまた、そうだった。この本を読むまでは。

主人公は､僕と同じ高校生｡そして二人兄弟の弟である所も同じである。兄弟の両親はすでに亡くなり、弟を兄が養っている。成績優秀な弟と対照的に兄は勉強が苦手で、何とか弟を大学にやりたいと思っている。だが、兄は仕事で無理をして体を壊し、満足に働けず頼れる親戚もいない。困った兄は強盗に入ったが、現金を盗んだ後、弟の好物の天津甘栗が目に入り、そこで鉢合わせした家人を殺してしまったのだった。全ては弟のためーこの過ちが、皮肉なことに弟の人生を狂わせていく。

この事件以降、弟には「強盗殺人犯の弟」というレッテルがはられ、そのレッテルは彼のあらゆる行動に障害となっていく。どんなに素生を隠しても、必ずばれてしまい、周囲から冷たい仕打ちを受けるのだ。

ここまで読んで僕ははっとした。小説を初めから読み、主人公に共感しているからこそ「なんて理不尽な！」と怒ってはいるけれど、もし何も予備知識がなかったら、僕は一体どんな態度で彼と接しているだろうか。理不尽に苦しめられていることを説明する場が彼にはないのだ。

幸せに手が届きそうになる度、兄のことで諦める結末になることを繰り返す弟に、兄は律義に刑務所から弟の案じる手紙を送って弟の神経を逆なでするのだ。弟は兄との絶縁を願い、転居先も知らせず、苦労の末に、ある会社に兄の存在を偽ってなんとか正社員として就職するが、ここでも兄のことが明るみになり、不当な配置転換で遠方に回されてしまった。

打ちのめされながらも黙々と働く弟に、その会社の社長が静かにかけた言葉は､「差別はね、当然なんだよ｡」主人公と同様に、社長から言い訳の言葉が出るのだろうと予測していた僕は愕然とした。差別が正当だ、なんて聞いたことがない。まして加害者本人でもないのに。

だが、続く社長の「自分が罪を犯せば、家族をも苦しめることになる。ーすべての犯罪者にそう思い知らせるためにも。家族の苦難も含めてが、その罪の償いなのだ｡」の言葉が僕の胸に深く突き刺さった。今まで持っていた理不尽な思いーそれは甘えに他ならなかったのだ。実は社長は、ある人からの手紙に動かされて、わざわざ弟に会いに来ていた。その人は後でわかることだが、自らも世間から逃げ回っていた過去を持ち、陰ながら弟を支えてきた女性だった。その手紙に心を打たれ、社長は、弟の人柄を見、そして最後に自分の足でしっかり歩いていくよう励ました。

その後考え方を変えた弟は､自分を支えてくれたその人と結婚し､娘も授かり､正々堂々と生きていこうとするが、ここでもまた家族と共に差別にあう。そんなさなか、家族が犯罪の被害に合い、弟は被害者の家族の立場になる。そして、学ぶのだ。正々堂々は自分たちのエゴで、本当はもっと苦しい道を選ぶべきなのだ、とー。

世間で事件が起こる度、鬼の首でも取ったかのように加害者、被害者の家族を追いまわし騒ぎ立てる。その裏では、こんなに深い苦しみがあるなんて、今まで考えたこともなかった。罪とは何か。罪を償うとは何をなすべきなのか。難しすぎて明確な答えはまだ得られてないが、少なくともこれだけは言える。犯罪に解決はなく、深い悲しみと苦しみだけが永遠に続くのだ。

（「手紙／東野圭吾著」　毎日新聞社　2003 年）

背中越しに死を考える

優良賞　　電気情報工学科３年　岩波　慶一朗

時折、僕は「自分とはどういう人間か」、ということについて考える。年齢は十八で、学生で……。そう言った事を羅列し、自分と関わりのある人や物事、自分の持つ知識をひと通り眺めてみるのだ。そうしてみると、僕にはまだ知らないことだらけで、世界が謎の吹き溜まりの様に思える。様々な知識や景色、自分にとって重要なものやそうでないものが、どろどろに混じり合っているのだ。それらの中から幾つかを拾い上げて知ることは、大きい喜びだと感じもする。だが、その吹き溜まりのなかで一つ、僕がいくら考えても全く分からなかったものがある。死ぬことについてだ。

生まれてから十八年間生きてきた中で、僕の知っている人たちは何人か亡くなった。その人たちは、優しいひいお婆ちゃんであったり、小さい頃から知っていた友達のお爺ちゃんであったりした。だが、それによって死ぬこととはどういうことかを、僕が心底理解できたかと言うとそうではない。関係のあった人たちの死を切っ掛けとして、死ぬことについてふと考えることはあるものの、漠然と怖いものなのかなとか、死んだら幽霊になるのかな、と言ったくだらないことしか思いつかない。

『象の背中』と言う本にであったのは、そんな日々の中での事だった。父親が興味深そうに読んでいたのが印象的で、僕も読むことに決めたのを覚えている。予備知識もなく本を読んだので、いきなり主人公である藤山が余命半年だと告げられ、茫然としている場面から始まったので、驚いた。この本の冒頭の場面はかなり詳細に描かれ、命の残りを宣告された人間の絶望や、音をたてて血管が詰まったように錯覚するほどの悲しみが伝わってくる。僕はこの時、一度本を閉じて深呼吸した。なんだか、死と言うのがまだ僕にとって触れるのが早く、恐ろしいものに思えていたからだ。そして、勇気をもって再び読みだした僕に応えてくれたのは、物語の中で余命を決意と共に生きる藤山の姿だった。

「自分の生きてきた中で関係した人たちに、どんな形でも良いから遺書を残したい。それは手紙と言う形だけでなく、言葉であったり、かわした目線であったりする」死ぬまでの時間を、そうしてすごすことに決めた藤山は、初恋の人や、同級生や、息子や娘、同じく余命一年と宣告された知人と様々な時間を共有する。僕はその一つ一つに泣いた。本を読んで泣くなんて、と恰好つけて思っていたりもしたから、それに僕自身が一番驚いた。僕が最も共感したのは、藤山が息子である俊介に余命が半年であると言うことを告白した場面だった。主人公とは違う人物に感情移入するのも変な話かもしれないが、僕自身と年齢の近い俊介が父親の死に対して、戸惑い、涙を流す場面に、僕は胸を突き刺されたかのような悲しみを共有した。あるいは、藤山と俊介に、僕の父と僕自身を重ね合わせたのかもしれない。時折どうしても煩わしく感じてしまう親子の関係だが、突然その親が死ぬと分かったら？平静でいられるだろうか。俊介は父の死に怯えて、泣いていたが、僕だったらどうだろう。俊介と同じように怯えるのか、それとも、俊介とは違った受け止め方をするのだろうか。この本を読んでから、たまに僕はその事について考えては、少し泣きそうになる。

藤山はその最期において、「この世に背中を向けて歩き始めた」と語っている。僕はこの文に藤山の、そして藤山を描きだした作者の最も強い意志があるように思う。人は生きている限り、誰かと向きあい続けている。藤山が家族や知人と言葉を交わし、何かを得ようとしていたように、誰かと向き合い続けなければならないのだと思う。だが、人が死ぬと言うことは、そんな誰かに背を向けるということだと、藤山の最後の言葉から感じたのだ。そして僕は、藤山の死を通して、あるいは生き方を通して、死ということそのものについて考えていたのだと、強く思った。まだ僕は死について理解することは出来そうにない。だが、父親がもし死んでしまったら、と僕が本を読んでそうしたように、死を考えることは出来る。そうして考え続けることが、生きると言うことなのではないのだろうか。この本は、そう示してくれたように思う。少なくとも僕は、今もまだ考え続けている。

（「象の背中／秋元康著」　扶桑社　2007 年）

「アンダーグラウンド」から学ぶメタファー

優良賞　　都市システム工学科５年　清水　光治

私は今年の春頃から、一人の作家の作品を読み続けることのおもしろさを知った。そうでなければこの本と出合うことはなかっただろう。

この本は一九九五年三月二十日に東京地下鉄で起きた「地下鉄サリン事件」の被害者から取材に応じてくれた六二人に対し、筆者本人が被害者一人ひとりと面談を行い、その内容を活字化したものである。

取材において筆者がまず初めに質問したのは、その被害者の個人的な背景であった。どこで生まれ、どのように育ち、何が趣味で、どのような仕事につき、どのような家族とともに暮しているのか――そういったことである。そして、オウム真理教団の五人の「実行者」たちが、尖らせた傘の先端でサリン入りのポリ袋を突き破り、サリンを地下鉄車内にまき散らした時、同じ車内に居合わせた人々は、「そこで何を見て、何を感じ、何を考えたのか」を取材し、それを活字化することで、事件の全体像が事細かく浮かび上がってくるような作品であった。

一つの事件に対し、このように一人ひとりに取材を行って、活字化をしている媒体は少ないのではないだろうか。しかも、事件が起きた一九九五年というと私の年齢は五歳である。もちろん、この事件に対する当時の記憶など、ほとんどない。同年、一月十七日に起きた阪神大震災のほうが大阪に住む私にとっては身近であった。私たちの世代からすると、地下鉄サリン事件は、「セクト集団が起こした例外的で無意味な犯罪じゃないか」という印象ぐらいのものではないだろうか。少なくとも私はそうであったし、この本を読むことで、私はどれほど無知であったかということを思い知らされた。

また、この本は事件の背景を明確にすることで、多くのマスコミが抱える報道に対する問題点――事件の被害者たちを「傷つけられたイノセントな一般市民」というイメージで固定するということを改善している。特に私がマスコミに対し嫌悪感を抱いているわけではない。世界中で様々なことが起きている昨今、報道に対するマスコミの限界もある。しかしそれで終わらせるのではなく、私たちは一つの事件に対し、その事件には、どのような背景があり、なぜそのようなことが起きてしまうのか――という問題意識を持つことは非常に重要なことではないだろうか。今回、事件の被害者である人々には顔があり、生活があり、人生があり、家族があり、矛盾やジレンマがあり、それらを総合したかたちで、物語がちゃんと一人ひとりにあるのだ。だから筆者は被害者個人の背景を重視し、それをもってこの事件の真相の追究を行った。

私たちはこの事件から何を学ぶべきなのか。筆者の一つの答えとして、それは「自我」であった。

もし私たちが「自我」を失えば、そこで私たちは自分という一貫した物語も失ってしまう。物語というものはまだまだ若い、これから社会に出ようとする私たち一人ひとりがもつ夢である。しかし、地下鉄サリン事件を起こした五人の実行者たちや、オウム真理教の教団員はこの「自我」というものを一人の男に委ねてしまった。自我を委ねることができれば楽である。その一人の人間によって与えられる物語にそって生きていけばよいのだから――実にシンプルかつ簡単なことだ。

家族や会社、ましてや宗教という、私たちが個としての存在を明確化させる何らかの集合体に身を置く時、組織に照応してゆくことで確立する思想や行動は、他者からは非日常なのである。

「アンダーグラウンド」――「地下」という「あちら側」の世界は、「地上」という「こちら側」の世界に住む私たちにとっては非日常であるが、「あちら側」から私たちを見れば、また同じことが言える。これらのメタファーは、互いに非日常を持ち合わせているという意味では対等な関係となるはずであり、どちらかが一方的に異質さを取り上げることは、何らかの根本的な過ちをおかしている可能性もあるのではないか。オウム真理教の不可解さを明らかにする鍵は、我々の日常生活にあるかも知れないという村上の立てた疑問はここに端を発しているのだろう。そして村上の言うとおり、「彼らは本当にこのようなことをすべきではなかったのだ。何があろうと」。

（「アンダーグラウンド／村上春樹著」　講談社　1999 年）

学生用推薦図書・雑誌

推薦図書コーナーに開架しています。（以下、抜粋）

機械工学科推薦

501.8.Y	AutoCAD 2010/AutoCAD LT 2010 基礎公式トレーニング
501.8.U	よくわかる 2 次元&3 次元 CAD システム AutoCAD 入門
501.32.T	材料の力学 第 2 巻
531.3.Y	わかる機械要素設計
548.3.M	ロボットメカニクス 構造と機械要素・機構
雑誌	「日経ものづくり」

電気情報工学科推薦

540.0.O	電気・電子工学概論
541.1.K	電気回路の基礎と演習
543.0.D	発電工学
543.0.D	発変電工学総論
雑誌	「ＯＨＭ」
雑誌	「トランジスタ技術」

都市システム工学科推薦

291.6.T	意外な歴史が秘められた関西の地名 100
369.31.D	津波から生き残る その時までに知ってほしいこと
423.8.N	図解はじめて学ぶ流体の力学
501.23.U	交差流れを診る ネットワーク流れの可視化に向けて
501.34.D	構造実験のてびき 2009 年版
511.3.S	英語で学ぶ土質力学 Soil Mechanics

建築学科推薦

453.21.O	最新日本の地震地図
501.8.S	ユニバーサルデザインのちから 社会人のための UD 入門
511.78.I	コンクリートの劣化と補修がわかる本 Plus
523.1.I	乾久美子：そっと建築をおいてみると
524.7.H	初めて学ぶ鉄筋コンクリート構造 新版
527.21.S	「51C」家族を容れるハコの戦後と現在

一般科目推薦

145.2.W	人はなぜ夢を見るのか 夢科学四千年の問いと答え
417.0.A	統計数字を読み解くセンス：当確はなぜすぐにわかるのか?
451.28.M	天気図がわかる：具体例を見て読んでわかる天気図に親しむ気象入門
830.79.K	新 TOEIC TEST リスニング出るとこだけ！ 直前 5 日間で 100 点伸ばす 18 の鉄則
837.7.W	Get the ball!(**Foundations reading library)**
雑誌	「CNN English Express」
雑誌	「大学への数学」

詳しくは、図書館 HP(http://www.akashi.ac.jp/lib/siryou/suisen10.htm)をご覧ください。

利用ランキング　2009.10.1 － 2010.9.30

ー図書ー

① 18 回 「俺の妹がこんなに可愛いわけがない 1-4」
① 18 回 「化物語 上下」
② 18 回 「傷物語」
③ 17 回 「確率統計」
④ 15 回 「中二病 取扱説明書」
④ 15 回 「オキナワの家」
④ 15 回 「家の顔」
⑤ 14 回 「家のいごこち」
⑥ 13 回 「家のきおく」
⑥ 13 回 「ベクトル・行列・行列式徹底演習」
⑥ 13 回 「フリーター、家を買う」
⑥ 13 回 「集まって住む」

ーDVDー

① 14 回 『ハリーポッターと謎のプリンス』
② 13 回 『LIVE STAND 09 ネタ祭り』
② 13 回 『M－1グランプリ the BEST 2001-2003』
② 13 回 『人志松本のすべらない話 ザ・ゴールデン』
⑤ 12 回 『ターミネーター4』
⑤ 12 回 『人志松本のすべらない話』
⑤ 12 回 『容疑者 X の献身』
⑦ 11 回 『重力ピエロ』
⑦ 11 回 『人志松本のすべらない話 其之弐』

ー雑誌ー

①「新建築」②「新建築. 住宅特集」③「住宅建築」
④「Newton ニュートン」⑤「A+U 建築と都市」
⑥「ディテール」⑦サッカーダイジェスト

図書館利用状況　（平成１７年度から平成２１年度）

項目／年度			１７年度	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度
年間	入館者数	時間内	44,711	39,850	39,449	35,768	36,114
		時間外	11,724	11,116	8,681	8,955	8,318
		計	56,435	50,966	48,130	44,723	44,432
	ＡＶルーム	計	3,987	3,272	3,720	2,839	2,042
	貸出者数	計	4,140	3,670	3,557	3,382	4,185
	貸出冊数	計	7,850	7,188	6,876	6,683	7,754
	開館日数	年間	286	294	295	291	283
一日平均	入館者数(時間内)		183	163	160	147	152
	入館者数(時間外)		50	46	36	38	36
	ＡＶルーム		14	11	13	10	7
	貸出者数		14	12	12	12	15
	貸出冊数		27	24	23	23	27

【開館時間】　時間内：平日 8:30～17:00　　時間外：平日 17:00～20:00　土曜日 10:00～16:30

サービスカウンターでおこなう手続き

貸出
学生証と資料（図書・雑誌）を添えて、カウンターで貸出手続きをしてください。返却が遅れると、貸出ができませんのでご注意ください。

返却
カウンター横の返却箱に入れてください。

更新（貸出期間の延長）

他の利用者の予約が無い場合は貸出延長が可能です。学生証と貸出中の資料を添えて更新手続きをしてください。

貸出できない資料

視聴覚資料、貴重書の貸出はできません。館内のみ閲覧できます。

予約

現在、貸出中の資料が返却されたとき優先的に貸出が行える制度です。カウンターでお申込みください。

学生希望図書

当館に備え付けを希望する資料があればリクエストできます。購入希望図書申込書にて、お申込みください。

資料の探し方

初期画面

資料検索システム（OPAC II）
情報検索コーナーに専用パソコンを設置しています。図書館蔵書資料の検索ができます。
マウスの操作だけで簡単に検索ができます。
わからないことがあれば、係員に相談してください。

検索語入力画面

館内施設の利用

情報検索コーナー
館内に 11 台のパソコンを設置しています。インターネットを利用して情報検索ができます。
ログインの際にはIDとパスワードを入力してください。

視聴覚（AV）資料の利用

工学･技術･語学･映画など約2,700種の視聴覚資料（DVD、ビデオ、CD、LD）を所蔵しています。
閲覧するときは、カウンターで視聴覚資料、ブースの 利用手続きを行ってください。
ブースのみの利用も可能です。TOEIC 学習コーナーもご利用ください。

開館時間など

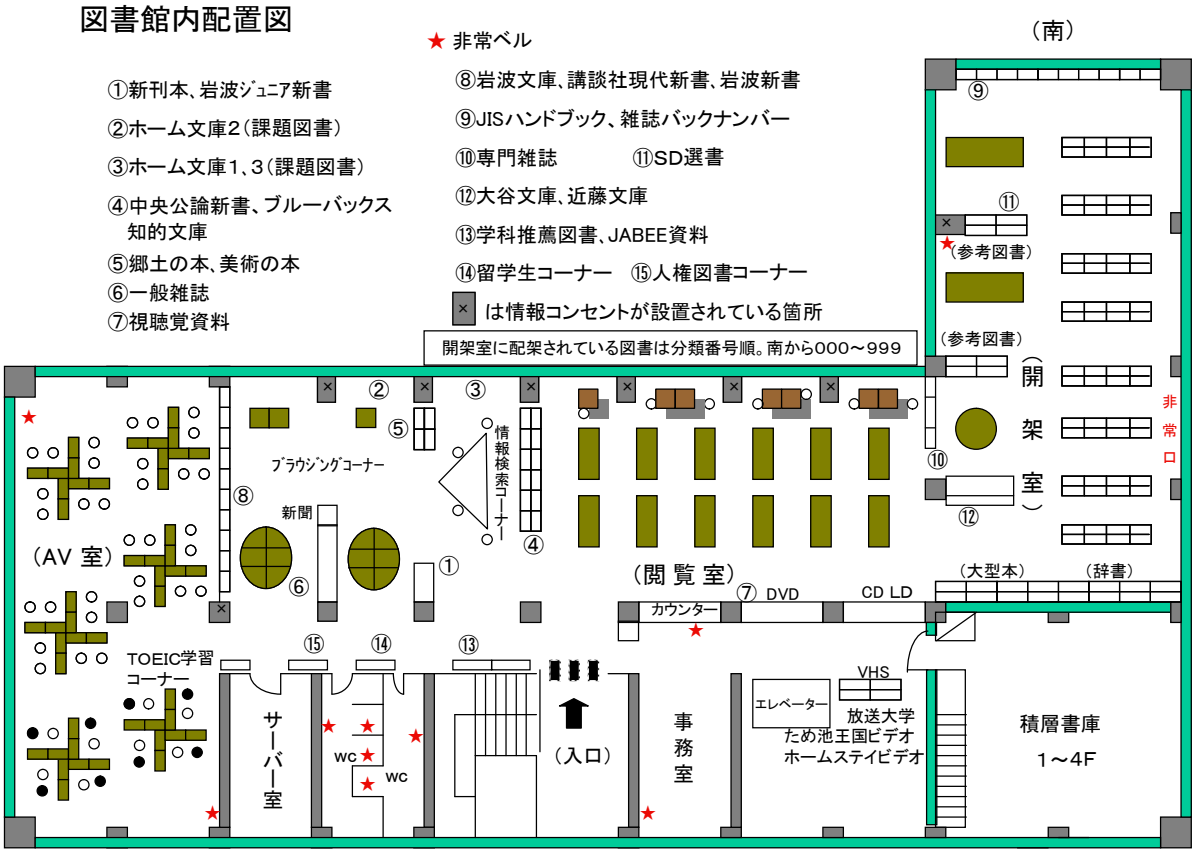
開館時間	
月～金曜日	８：３０ － ２０：００
土曜日	１０：００ － １６：３０
春・夏休み期間中	８：３０ － １７：００
休館日	
日曜日・祝日 春・夏休み期間中の土曜日 年末・年始　１２／２８―１／４	

	貸出冊数	貸出期間
通常	５冊	２週間
卒研	３冊	２ヶ月

卒研貸出は通常とは別に貸出ができます。対象者(学科４年生以上、専攻科生)は卒研カードを発行しますのでカウンターで手続きしてください。

学科推薦図書・ＪＡＢＥＥ関連資料・留学生向図書・視聴覚資料・参考書など各コーナーに別置しています。

図書館内配置図



【編集後記】

図書館報第 46 号をお届けします。お忙しい中、原稿をお寄せくださった皆様ありがとうございます。本号の各記事が読者や図書館の利用に役立っていけたらと願っています。

明石工業高等専門学校図書館報　第 46 号　2010 年 12 月発行
編集・発行　明石工業高等専門学校図書館　〒674-8501　明石市魚住町西岡 679-3　(078)946-6051